エスプレッソ【espresso】

美位矢 直紀

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
エスプレッソ【ｅｓｐｒｅｓｓｏ】

【Ｎコード】
Ｎ６１１６Ｄ

【作者名】
美位矢　直紀

【あらすじ】
さらさらと、ふわふわとしてた時代。好きな街での、恋の話。

出逢い

・・・私、あんまり上手くないの。どうしても薄くなっちゃって・・・

・・・meeyaさんは？・・・

ある女性とのそんな会話で、
痛い失恋を思い出しちゃってさ。

コーヒーが大好きなんですよ。

そしてコーヒーが好きだったんですよ、彼女。

仲間とよく行ってたBARがあって、
彼女そこで働いてた。

細い通りに立ち並ぶ雑居ビルの二階。
タワーレコードとかマックとか雀荘とか炭焼屋とか、
僕が生活を組み立ててた場所だったんだけど。

“綺麗な女性だな”ってずっと思ってて、でも、喋る事なんかまるで無くてさ。

いつかの昼間、
店の前を友達と歩いてた時、
「メシ食っていこうぜ。」ってそいつが言ってさ。

その一言がなきゃ、この話も無かったのかなと。

ランチやってたんですよ、その店。

彼女がカウンターの中にいてさ。

「昼もいるんだ。」
「ほんとは土曜日だけなんですけど。」

初めて交した言葉は、そんな感じだったと思う。

彼女、黙ってると冷たそうで、取っ付きにくそうなんだけど、
喋ったり、笑ったりだと、全然印象が違っちゃってね。

その時に、お互いコーヒー好きなんだって事が分かって、
分かってからは、なんちゅうか、ほんと急に気持ちが近づいたとい
うか。

普通“ランチ”は、“コーヒー”なんだけど、
彼女、エスプレッソにしてくれたんですよ、話の流れがそんな風だ
ったからだと思うけど。

「私、苦いコーヒーが好きなの。」って言ったの、ハッキリ覚えて
る。
そしてそんな会話の頃には、彼女を近い内食事に誘おうって考えて
た事もハッキリ覚えてる。

友達は咽喉に刺さる様なエスプレッソの苦さがダメだったみたいで、
カフェオレ状態にしてたな。

彼女、そんな友達を見て笑ってた。

僕はそんな彼女にやられてたんだよね。

出逢い（後書き）

エッセイです。
サラッと読み流して下さい。

恋愛小説
「ぬるい恋愛」
「Ｂｉｔｔｅｒ　Ｖａｃａｔｉｏｎ」
併せてお読み頂ければ幸いです。

別れ

その一ヶ月くらい後だったと思うんだけど、
彼女が僕の家に初めて泊まった次の日の朝、
ま、普通、コーヒーかなんか飲むよね、だからその日も普通にコーヒードリップしようとしてたんだ。

柔らかい声が聞こえたんですよ、
「エスプレッソがいい。」って、ベッドの中から。

“そーだよな。”って感じだったな、あの時。

僕の家にはマシンと微紛にした深煎りの豆があったから、その一言で我に返ってさ。

「美味しいね。」
ベッドの中で上半身起こしてそう言った彼女の胸、綺麗だったな。

僕は彼女の隣に座って、左手にエスプレッソ、右手で彼女の胸を握ったり撫でたりしてた。
悪戯のつもりでさ。

爽やかな、太陽の光が部屋に洩れてるって感じの、いい朝だったんだ。

彼女、カップを口元から離さず、
何かを企んでる様な上目使いのまま、右手で僕を握り返しに来てさ。

“過去のエッチにランク付けてよ”って事が許されるのなら、
間違いなく最初にエントリーするエッチだった。
照明じゃなく自然光だったから、
彼女の体がものすごくリアルに見えててさ。

でも、
相変わらず別れるんだよね。
一年ぐらい付き合ってたんだけど。

ケンカは無かった。

クール過ぎたんだ、お互い。
大好きなのに「大好き」って言えない距離でうろついてたっていうか。

束縛がカッコいい事だとは思ってなかったんだよね、僕は。
多分彼女も。

きっとコーヒー好きな人は、
素直になれない“ええ格好しぃ”が多いんだな。

「・・・終わりにしようね。」
「・・・いいんじゃない。」

飲んだ後、歩きながらそんな会話だったと思う。
その夜がそんな日になるって分かってたんだ。
そんな風な事、ずっと態度には出してなかったんだけど。

ひとつ覚えてるのは
相当格好付けてたって事だけ。

次の日の朝、エスプレッソ一人で落として飲んだんだよね。
“失恋”とか“別れ”とかの後は、

何故か何時もそんなセンチメンタリズムなんだ。
そういう風に浸りたかった自分、よく覚えてる。

美味しかったのかなぁ。

正直、どんな味だったかは覚えてないんだ。
でも、
最高の仕上がりだったとは思う。
そう仕上げなきゃ失礼だったんですよ、彼女に。
だって、
彼女が選んだイタリアンローストの豆を
彼女と買いに行ったミルで挽いてマシンに掛けたんだから。

別れ（後書き）

恋愛小説

「ぬるい恋愛」

「Ｂｉｔｔｅｒ　Ｖａｃａｔｉｏｎ」

併せてお読み頂ければ幸いです。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6116d/

エスプレッソ【espresso】

2010年10月10日22時06分発行